

新潟地方気象台の3か月予報に基づく農作物等の管理対策（第4報）

令和元年7月2日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台から令和元年6月25日に発表された「北陸地方3か月予報」によると、7月は平年に比べ曇りや雨の日が多く、気温はほぼ平年並みの見込みです。8月は平年と同様に晴れの日が多く、気温はほぼ平年並み、9月は天気が数日の周期で変わり、気温は平年並みか高い見込みです。

向こう3か月（7月～9月）の降水量は平年並みか多く、7月は前線や湿った空気の影響を受けやすい見込みです。

今後の気象変動に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

記

I 水稲

1 水管理

- (1) 停滞水の排出を速やかに行い、中干しの効果を十分に得るため、溝切りの溝が埋まっている場合は補修を行う。
- (2) 中干しは、遅くとも出穂の1か月前をめどに終了し、終了後は発根促進や根の健全化を図るため、浅水の間断かん水を実施し、徐々に飽水管理に移行する。
- (3) 7月は平年と比べ曇りや雨の日が多いと予想されている。大雨の時は稲体が冠水しないよう速やかな排水に努める。ただし、河川への影響を考慮し、水尻は完全に落とさず、一定水位を保った上で排水を行う。
- (4) 山間・高冷地で7月中下旬に異常低温が予想される場合は、不稔粒の発生を防止するため、一時的に深水管理を行い、幼穂を低温から保護する。
- (5) フェーン現象による高温が予想される場合は速やかにかん水して、稲体からの急激な蒸散による光合成能力の低下や白穂の発生を防止する。

2 穂肥

- (1) これまで生育が順調であることから、幼穂形成期が早まり、出穂期がやや早まる可能性がある。早生品種は、早めに幼穂確認を行い、穂肥施用が遅れないように注意する。
- (2) 特に、つきあかり、ゆきん子舞の多収栽培では、穂肥の施用が収量を確保するポイントとなるため、1回目の穂肥を幼穂形成期（出穂期25日前頃）に、遅れることなく施用する。
- (3) コシヒカリの1回目の穂肥施用は、倒伏や籾数を抑制するため、幼穂伸長期間の気象予報を加味したうえで、幼穂形成期の草丈と葉色の積値、株当たり茎数と葉色の関係から判断する。
幼穂形成期の草丈と葉色の積値が大きいと倒伏程度が大きくなり（図1）、幼穂形成期の株当たり茎数が多い場合や葉色が濃い場合は籾数が過剰となる恐れがあるので（図2）、このような場合は施用時期を遅らせたり、施用量を控えめにする。
- (4) コシヒカリの2回目の穂肥施用は出穂期の葉色（SPAD値）32～33をめやすに後期栄養を維持するため確実に施用する。

(5) 曇りや雨が多い場合は、葉色の褪めが緩慢となったり、下位節間が急伸するなど生育変動に対応した穂肥対応が必要になる場合がある。県や地域の指導機関が発信する情報に十分留意して対応する。

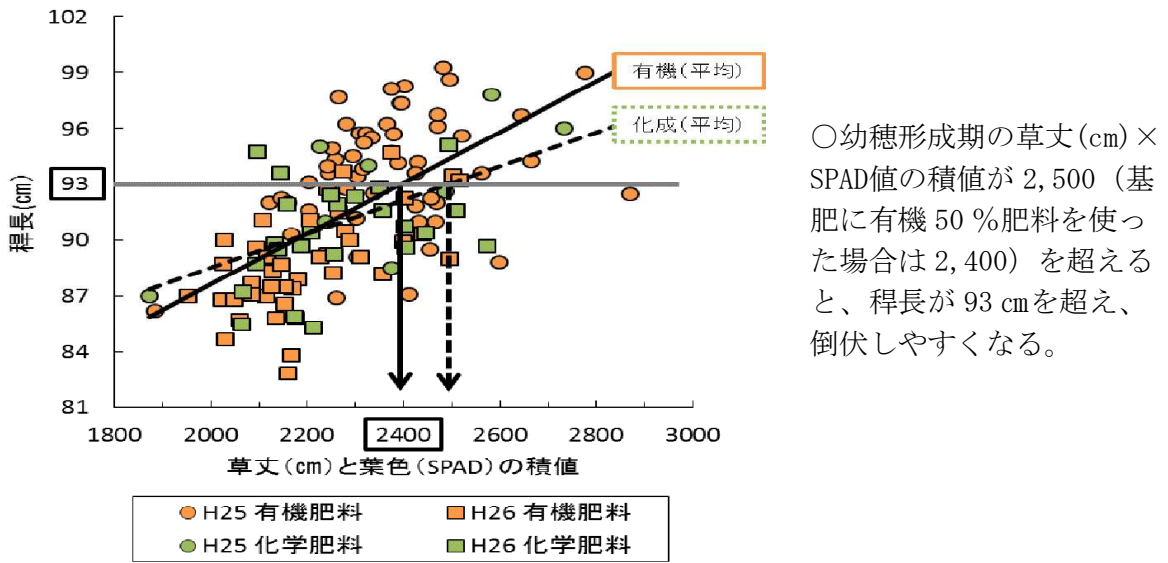


図1 基肥の種類に対する幼穂形成期の草丈と葉色の積と稈長の関係 (平成25～26年)

注) 出穂18日前の穂肥窒素量は未施用または1kg/10aを施用した。

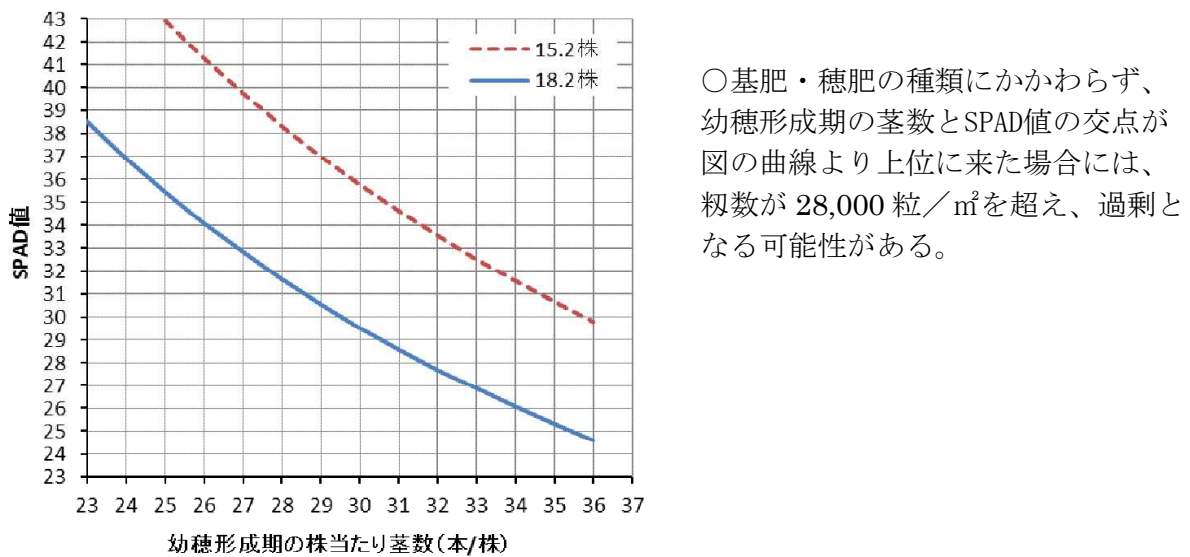


図2 籾数が28,000粒/m²となる幼穂形成期の株当たり茎数とSPAD値の関係 (栽植密度15.2株/m²(50株/坪)及び18.2株/m²(60株/坪))

3 病虫害防除

(1) 降雨や日照不足は、いもち病の発病を助長する。特に、コシヒカリBL以外の品種において、葉いもちの発病が認められた場合は、直ちに防除を行う。また、コシヒカリBLにおいて発病が多い場合は、病虫害防除所又は農業普及指導センターへ連絡して対応を相談する。

- (2) 穂いもち防除は、薬剤毎の散布適期に実施する。特に、わたぼうし、新之助及び新潟次郎や業務用米等の多収栽培では防除を必ず実施する。
- (3) 墨黒穂病、稲こうじ病及びごま葉枯病の常発地や前年に多発したほ場では、薬剤防除を実施する。
- (4) 斑点米カメムシ類の増殖を抑えるため、雑草種子が結実しない間隔（約3週間）で畦畔・農道の草刈りを継続し、品種およびカメムシの発生種に応じた薬剤防除を確実に実施する。ノビエやイヌホタルイ等の水田内雑草は、斑点米カメムシ類の水田内への誘引源・増殖場所となるため、水田内雑草の除草を徹底する。

II 大豆

1 栽培管理

- (1) 中耕・培土後は畦間に停滞水が生じないように、畦間の溝を周囲明きよにつなげる。
- (2) 梅雨明けまでは、湿害を防止するため、暗きよ栓を開放しておく。
- (3) 梅雨明け後は、ほ場条件に応じた暗きよ栓の開閉を行う。排水不良で常に地下水位の高いほ場では、湿害軽減のため暗きよ栓は開放しておく。地下水位が60～70cm以下に低下する排水の良いほ場では、降雨等により地下水位が上昇する場合を除き、暗きよ栓を閉めて土壤水分の保持に努める。
- (4) 地下水位は市販のラセン式穴掘り器の柄を延長して、ほ場に約1mの深さの細い縦穴を掘ることで観察できる。ラセン式穴掘り器の改造方法や設置方法等で不明な点がある場合は、最寄りの農業普及指導センターへ問い合わせる。
- (5) 大雨の前後は、ほ場内排水溝及び排水口の点検・補修を行い、地表水の迅速な排除を促す。

2 病虫害防除

- (1) 里のほほえみで、開花期頃までに葉焼病の発病が認められる場合は、薬剤防除を実施する。
- (2) 7月及び8月上旬の降雨日が多く紫斑病の多発生が予想される場合は、薬剤防除を追加する。
- (3) ウコンノメイガの加害（葉巻の発生）は7月中旬から始まり、7月下旬から8月中旬にかけて急増する。葉の巻き始める加害始めを見逃さないよう注意し、被害拡大が懸念される場合は薬剤で直ちに防除する。

III そば

1 栽培管理

- (1) そばは湿害に極めて弱いため、排水不良ほ場には作付けしない。転換畑で作付けする場合は、団地化に努めるとともに、明きよと弾丸暗きよを組み合わせるなどの営農排水対策を実施する。
- (2) 石灰散布は、土壌 pH 6.0～6.5 を目標とし、は種の1週間前に行う。
- (3) 施肥量は、10a当たり成分量で窒素2～3kg、リン酸4～8kg、カリ5～10kgを標準量とする。特に、リン酸や加里は耐倒伏性の強化や稔実を高める効果があるので不足ないように施用する。条播の場合は窒素を2割程度控えめとし、肥料が種子に触れないようにする。また、肥沃なほ場では基肥を無窒素とし、生育不足の場合にのみ、着蕾期から開花始め頃までに10a当たり窒素成分で1kgを追肥する。
- (4) 耕うんは、碎土率70%以上、耕深15cmを目標とし、は種当日に行う。品種・標高別のは種期めやすは表のとおりである。

- (5) 10 a 当たりのは種量は条播で5 kg、散播で7～8 kgをめやすとし、m²当たり100～120本の苗立ち数を確保とする。

表 品種・標高別のは種期めやす

品 種	平坦地 (標高200m以下)	中山間地 (200～400m)	準高冷地 (400～600m)
とよむすめ	8月上旬	7月下旬～8月上旬	7月下旬
信濃1号等	8月中～下旬	7月下旬～8月上旬	7月下旬

- (6) 水田転換畑など排水性が不良なほ場では、は種位置が高く、出芽時及び生育時の湿害が軽減できる畝立て播種が有効である。

2 病虫害防除

- (1) 立枯病は耕種的防除で対応する。排水対策の徹底、過繁茂防止とともに連作を避ける。
- (2) ハスモンヨトウは、老齢になると防除効果が劣るので、できるだけ発生初期に薬剤散布する。ただし、開花期間中の防除は、訪花昆虫に影響があるので避ける。

IV 野菜

1 施設野菜

- (1) きゅうり、トマト等の施設栽培では、草勢を維持するため、かん水や追肥を適切に行う。また、日照不足が続いた後に天候が急激に回復すると高温障害が発生しやすいので、遮光や換気等により適切な温度・湿度管理に努める。降雨や日照不足により灰色かび病等が多発するおそれがあるので、換気による湿度管理や、り病葉及びり病果の除去など、耕種的防除を徹底する。
- (2) 親苗を育苗中のいちごは、うどんこ病の防除を徹底する。また、採苗直後はしおれに注意しスムーズな活着を促す。

2 露地野菜

- (1) えだまめ(茶豆)は、開花期の生育量を目安に追肥の可否を判断する。倒伏の恐れがあるほ場については、先刈りや支柱等による倒伏対策を行う。また、収穫前追肥は、莢の完成期に遅れないよう実施する。
- (2) アスパラガスは株の衰弱を招かないよう追肥を行い、降雨による停滞水の排出、土壌乾燥時のかん水等を適切に実施する。また、1季どりにおいて前年の早期枯れ上がりで株が衰弱している場合は、早めに立茎を開始するとともに、若芽には茎枯病菌が感染しやすいため防除を徹底する。
- (3) すいかは寡日照条件が続いた後に高温・強日射となると日焼け果の発生が懸念されるため、露出している果実はワラやつるなどで覆う。

3 病虫害防除(露地野菜)

- (1) えだまめ(茶豆)は、梅雨の長雨により多湿状態が続くと、シミ症や病害の発生を助長することから、明きよによる排水対策と併せ予防的防除を行う。
- (2) ねぎは、今後の降雨と気温の上昇により軟腐病の発生が懸念されるため、うね割りや明きよによる排水対策を徹底する。葉枯病はべと病やさび病の病斑跡に2次的に発生し、連作ほ場では多発生が懸念されることから、べと病・さび病の防除を徹底する。
- (3) すいかの密閉トンネル作型は、梅雨期の降雨により、炭疽病等の発生が懸念されるため、降雨の合間の晴天時に防除を徹底する。また、葉枯症状の発生が見られること

から、草勢維持のため乾燥時にはスプリンクラーかん水（砂丘地）を行い、併せて葉面散布剤を散布する。

V 果樹

1 栽培管理

- (1) 樹種を問わず生育進度は平年より数日早いと予想される。除袋や収穫前防除が遅れることのないよう、適期の管理を励行する。
- (2) かきは仕上げ摘果を早めに行うことで大玉生産が期待できるので、7月末までに仕上げ摘果を実施する。
- (3) ぶどうは過度な摘房を控え、高温による縮果症予防対策を行う。
- (4) ももは収穫期が近づき果実肥大が進むので、土壌の乾燥防止対策を実施する。
- (5) 露地いちじくは摘しん時期を遅らせることなく、7月末を目安に作業を実施する。

2 気象災害対策

- (1) 降水量は平年並か多いと見込まれている。水位の増加により水害を受けてきた時期でもあるので、地表面の排水状況を確認し、不十分な場合には対策を講ずる。
- (2) フェーン現象等で長時間高温状態が継続する場合には、露地栽培であっても水分ストレスによる生育停滞や生理障害果の発生が助長されるので、ほ場条件に応じて敷きわらやマルチ等の乾燥防止対策の実施や、スプリンクラー等かん水設備の点検をして備える。
- (3) 台風やダウンバーストなど、通常とは異なる風向きや強風にも備えて、防風網・防風林等の点検整備にも配慮する。

3 病虫害防除

- (1) 各樹種とも病虫害の重点防除期なので、発生予察情報等を参考に適期防除に努め、降雨が続く場合でも極力散布間隔を空けないように留意する。
- (2) 日本なしでは黒星病、西洋なしではセイヨウナシ褐色斑点病などの感染拡大を招くことのないよう、特に注意して対策をとる。

VI 花き

1 球根養成

- (1) ユリの球根養成では、降雨等でほ場が過湿とならないよう排水を徹底するとともに、高温・乾燥が続く場合には適宜かん水を行う。
- (2) チューリップ、スイセン等の収穫後の球根は、湿度が高いと球根腐敗病や青かび病等病害の発生が多くなるので、送風等により初期乾燥を徹底し、できるだけ風通しの良い場所で本乾燥する。

2 施設切り花、鉢物

- (1) 長雨・日照不足による茎葉の軟弱化や病害の発生を防止するため、換気・送風等により施設内の湿度上昇を防ぐ。
- (2) 降雨等で日照不足が続いた後、強い日射しがあると葉焼け（チップバーン）等の生理障害を生じやすいので、日射量に応じたこまめな遮光資材のかけ外しや換気等により適切な温度・湿度管理に努める。

3 露地切り花

- (1) ユリ、宿根草類等露地の切り花類では、降雨等では場が過湿とならないよう排水を徹底するとともに、高温・乾燥が続く場合には適宜かん水を行う。
- (2) 強風等で茎葉が傷ついた場合は、傷口や枯死部分から病気が発生しやすいので、予防的防除を行う。

4 病虫害防除

- (1) 降雨や日照不足により、ユリでは葉枯病の発生が懸念される。また、アスター、トルコギキョウ等の1・2年草切り花や鉢物類では灰色かび病等の病気が多発するおそれがあるので、発生が認められた場合は早めに防除する。併せて、施設では換気や送風による湿度管理を行う。
- (2) アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類の他、キク、ヒマワリ、トルコギキョウ等ではヨトウムシ類などチョウ目害虫の発生が多くなるので、発生状況を早期に把握し、迅速に防除する。
- (3) 高温時の農薬散布は薬害のおそれがあるので、朝・夕の涼しい時間帯に散布する。

VII 畜産

1 家畜の管理

- (1) 急激な気温上昇に伴う家畜の生産性の低下、熱射病等を防止するため、換気・送風、寒冷紗等の暑熱対策を実施し、家畜の体感温度の低下に努める。
特に、梅雨明け後の急激な気温上昇への備えを徹底する。
- (2) 家畜の観察に注意を払うとともに、餌槽や飲水設備を清掃・点検し、良質な飼料やミネラルを給与し、新鮮な水を十分飲めるようにする。
- (3) 熱射病等により家畜に急激な体調の変化が見られる場合は、速やかに獣医師の診療を受ける。

2 飼料の管理

- (1) 気温の上昇に伴いサイレージの二次発酵（好气的変敗）が起こりやすくなるため、ロールベールサイレージは開封後できるだけ早めに給与する。
- (2) 飼料は風通しの良い日陰に保管し、カビの発生、変敗に注意する。カビの発生や変敗などが見られる飼料は給与しない。

3 飼料作物の管理

- (1) 排水が不良な場合は、明きよによる排水対策を行う。
- (2) 永年性牧草は夏枯れ防止のため、梅雨期～盛夏にかけては刈り高を10 cm前後とし、牧草の貯蔵養分の消費を少なくする。
- (3) 高温時の窒素追肥は牧草の生育に障害を起こす恐れがあるので、窒素成分で10 a当たり2～3 kgを上限に草勢を見ながら加減する。